

## 台湾のセラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向

○徐 玉珠(〔台湾〕国立屏東教育大学体育学系非常勤講師)

キーワード：セラピューティックレクリエーション、研究の傾向、量的研究、質的研究

### I 前言

セラピューティックレクリエーションという、半世紀ほどの歴史しか持たない新しい学術は、アメリカで学術理論と実践研究が盛んになるにつれて、各地の医療機関、コミュニティ機関、学校でのカウンセリングなど幅広く運用されるようになった。すでにあらゆる問題を抱えたあらゆる年齢層(児童、青少年、成人、高齢者など)において大きな効果を挙げており、アメリカ中の社会に受け入れられている(徐玉珠, 2007)。

一方、親念の上で非常にアメリカの影響を受けている台湾でも、セラピューティックレクリエーションという専門学科への関心が高まりつつあり、ここ数年スポーツレジャー、レジャー観光産業などの領域で、セラピューティックレクリエーションに関する研究論文が数編発表されている。しかし理論でも、応用実践の系統研究でもまだそれほど深い探究に至っていない。

したがって、本文は台湾のセラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と原創性実践研究の成果の内容分析を通じて、台湾でのセラピューティックレクリエーション研究に対する理解の増進に期待するものである。

この目的を達成するために、筆者は各国の研究者が台湾で、あるいは台湾の研究者が国内外で発表し、雑誌等に掲載した文献、またシンポジウムなどで発表されたセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献を分析の対象にし、同時に量と質の分析も行い、台湾のセラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と重要な成果の内容を明らかにし、また将来の課題、発展の方向を見出し、今後の台湾セラピューティックレクリエーション研究における参考資料の提供を試みるものである。

### II 研究方法

各国の研究者が台湾で、あるいは台湾の研究者が国内外で発表し、雑誌等に掲載された、またシンポジウムなどで発表されたセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献を収集し、整理分析を行い、同時に量と質の分析も行い、さらに台湾のセラピューティックレクリエーション研究の特徴、成果を理解する。

#### (一) 研究対象

分析の対象となるセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献の数は、修士博士論文やシンポジウム発表の論文、雑誌等に掲載されている論文等合計 44 件である。

#### (二) 分析の方法と原則

##### 1. 量の分析

(1) 収集したセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献を整理し計算する。収集した文献を発表年代順に整理し、発表者、所属領域をまとめた一覧表を作成した。

(2) 収集したセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献を年代別に計算し数量化する。

(3)更に、収集したセラピューティックレクリエーション関連の論文や文献の翻訳表現用語、文献類別、研究形態、研究者の所属領域、所属国家と地域を分類して計算し、数量化する。

### Ⅲ 研究分析と考察

(一)台湾セラピューティックレクリエーション研究の状況と特色(量的分析)

表 1 に示す計 44 件の台湾セラピューティックレクリエーション (Therapeutic Recreation, TR) 関連の論文や文献は、その殆んどがアメリカの文献を研究対象としている。これらのセラピューティックレクリエーション関連の論文は、大多数はアメリカのセラピューティックレクリエーションの歴史、定義、目的、価値あるいは媒材、実行過程、各種モデルケース、専門家の養成、資格制度化など概念、原理、思想と関連する応用の論述を考察したものである。台湾でセラピューティックレクリエーションへの関心が高まった主な原因は、アメリカのセラピューティックレクリエーションという学科が、台湾でも次第に注目されてきたのは、セラピューティックレクリエーション啓蒙の活動が発展したためともいえる (茅野宏明, 1987)。そして台湾の人にセラピューティックレクリエーションという専門学科の重要な基礎教育を理解させるためである。

表 1 台湾セラピューティックレクリエーション文献発表の年代、発表者、所属領域一覧表(略)

表 1 から、台湾初のセラピューティックレクリエーション関連の文献は 1983 年に発表されたことがわかる。これはアメリカの論文「休閒治療師—專業人員的新領域」(表 1-N0.1)で、中国語に翻訳され発表されたものだが、これが正式に台湾のセラピューティックレクリエーション関連の研究の幕開けをもたらした。続いてセラピューティックレクリエーション研究の全体的な推移を見ると、まず年代別には図 1 のように、1980 年代にわずか 2 篇 4.6%だったが、1990 年代には 3 篇、6.8%を占め、2000 年以降大幅に増加して今年(2007 年)までに計 39 篇、全体の 9 割近く(88.6%)を占めている。次に年度別の研究論文の数量分布を見ると、最高は 2007 年(13 篇)、次いで 2004 年と 2005 年(各 7 篇)、そして 2003 年(5 篇)と続いている(表 2)。また、「治療式遊憩導論」(表 1-N0.44)はセラピューティックレクリエーションに関する初の中国語訳の書籍(2007)である。

これらの表から、台湾セラピューティックレクリエーション研究は 1980 年代前半にアメリカの学術影響を受けて始まったと言える。しかも明らかに 2000 年以降になってやっと研究が盛んになってきている。台湾セラピューティックレクリエーション研究がそのように急激に大幅な成長をみせた大きな原因は、台湾政府が 1990 年代末に導入し始めた週五日制(いわゆる週休二日制)である。これにより台湾の人々の休息時間が増加し、レジャー活動の品質の重視、健康意識の高まりが促進され、また社会もそれを徐々に受け入れたのである。加えて、台湾運動レジャー関係の学部学科が急激に増えたことも要因のひとつといえる。1995 年から 2007 年までのたった 12 年間で、全国約 100 余りもの大学が次々とレジャー関係の学科、大学院を創設している(謝立文, 2005; 林慧珍, 2005)。

### 図 1 文献数の年代別推移(略)

### 表 2 年代別論文分布表(略)

ところで、関連論文で使われている「セラピューティックレクリエーション」という名称の中国語訳には主に「遊憩治療」、「休閒治療」、「治療式遊憩」、「休閒遊憩」、「休閒遊憩治療」の5種類がある(表3示)。その中でも「休閒治療」という翻訳表現は最も多く計28篇、63.6%を占め、次いで「治療式遊憩」(計9篇、20.4%)、第三位は「遊憩治療」(計5篇、11.4%)である。このように多岐にわたる翻訳表現に関し、日本を例にあげると、日本の学者鈴木秀雄(2000)は「セラピューティックレクリエーション(中国語では治療式遊憩にあたる)」と訳するのが本来の意味を最も忠実に表すことができるとしている。しかし茅野宏明(1987)は、多くの人々がまだ「セラピューティックレクリエーション」について完全には理解していないため、まだこの名称に統一されたわけではないとしている。一方台湾でも統一された名称はまだなく、学者林旭竜(2007)は、「セラピューティックレクリエーション」実施の過程が治療行為、レジャー教育、娯楽・休息の方式とその活動の選択、といった要素を含むため、「休閒遊憩治療」という訳がその理念と精神にふさわしいとしている。また、ほか台湾の学者の間では、「休閒治療」と訳した場合、「治療式遊憩」の中の治療段階(Treatment)の意味にとどまり、「治療式遊憩」という名称を使うことによって、初めてレジャー式治療、レジャー教育とサービス参加の3段階のすべてを含む意味を持つことができる、という意見もある。

### 表 3 翻訳表現用語(略)

続いて、セラピューティックレクリエーション研究の文献を分類すると、表4で示すように観点(理論性)論述及び原創性実践研究の2種類に大別できる。そのうち観点(理論性)論述は計36篇、81.8%と最も多く、次いで原創性実践研究は計8篇、18.2%である。2002年(NO.8)発表の「国人対休閒治療消費意願之研究」は台湾セラピューティックレクリエーション原創性実践研究の第一号である。加えて研究形態を見ると、学者(研究生を含む)による独立研究が最も多く計32篇、74.8%を占め、次いで複数の学者(研究生を含む)による共同研究が計4篇、9.1%、第3位は実務執行者の独立研究と翻訳でそれぞれ3篇、6.9%を占めている(表5)。

### 表 4 文献類別(略)

### 表 5 研究形態(略)

研究者の所属領域を分類すると、表6に示したように(1)体育・レジャースポーツ(2)特殊教育(3)心理・カウンセリング(4)観光事業(5)バイオ事業管理(6)企業管理・管理学(7)レジャー事業管理(8)作業療法(9)福祉学(10)医療リハビリの10種類の専門領域に分けられる。その内訳は体育・レジャースポーツ専門領域の専門家が最も多く(計27篇、61.0%)、次いで観光事業専門領域の専門家(計4篇、9.1%)、心理・カウンセリング専門領域の専門家(計3篇、6.9%)となっている。最も早くこの研究に注目したのは特殊教育と心理・カウンセリング専門領域の専門家で、初期にセラピューティックレクリエーションを特殊教育の方面で運用しようと考え、レジャーを通じたカウンセリングによって学習障害ある学生の学習能力を高めようとする研究がなされた(陳惠美,2003;李翊豪,2005)。その後は体育・レジャースポーツの専門家による研究が殆どで、スポーツやレジ

ヤーへの関心の高まりが影響していると考えられる。その他観光事業の専門家による研究は、ここ数年台湾政府が積極的に推進しているレジャー観光・健康旅行等との関連が考えられる。

次に文献発表者の所属国家と地域別を見ると、台湾を主とする研究については、当然台湾の研究者が一番多く(計 34 篇、77.2%)、次いでアメリカが計 8 篇、18.2%を占めている(表 7)。なぜアメリカ、日本、韓国の発表者が台湾のセラピューティックレクリエーションを研究したのか。それは台湾人の国際観を高め、国際学者との交流の機会を増加させるため、台湾は 2004 年に初めて国際シンポジウムを開催し(2004)、アメリカの学者を招聘して以来、2007 年にはアメリカの他更に日本、韓国の学者を招聘し、「2007 高齢者セラピューティックレクリエーション国際シンポジウム」を開催した(美和, 2007)。もう一つの重要な原因は、ただひたすら欧米の認識、価値観だけを観察して模倣し、転用することにより、台湾の独自性を欠いたり、実践の過程で同じ失敗を繰り返したりするのを免れるためである。そこで発祥地のアメリカ以外に近隣の日本、韓国の経験も参考にし、その上で台湾独自の経験を踏まえて研究を進めようというのである。

以上のような文献分類、研究形態及び研究者の所属領域、所属国家と地域別の量的分析を見ると、台湾セラピューティックレクリエーション研究は観点(理論性)論述が多いが、原創性実践研究こそもっと重視、強化されるべきである。その研究の方向は多様な発展を呈し、体育、レジャースポーツと心理、カウンセリング、観光事業等様々な分野の観点からセラピューティックレクリエーションを探求している。そして大部分が学者(研究生を含む)の主導的な研究の形態により、同時に国際観、国際視野を備え、しかも本土性(草根性)経験の構築の重要性に対する考慮が必要であること、それが台湾のセラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と特色であるといえる。

表 6 研究者所属領域(略)

表 7 所属国家別と地域(略)

#### 引用文献

- 鈴木秀雄(2000)：セラピューティック・レクリエーションー障害の軽減・健康の維持を願う人へのレクリエーション。日本東京：不昧堂。
- 茅野宏明(1987)。セラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と今後の課題--日本レクリエーション学会における論文発表を中心に。武庫川女子大学紀要。通号 35，183-189。
- 李翊豪(2005)。醫療人員對休閒治療的認知與態度之研究。朝陽科技大學休閒事業管理系碩士論文。未出版，台中。
- 林旭龍(2007)。休閒遊憩治療。休閒遊憩：理論與實務。台北：前程文化。
- 林慧珍、吳承典(2005)。「休閒運動管理」系所之定位與發展。休閒運動期刊，4,127-138。
- 徐玉珠(2007)。治療式遊憩在高齡期健康促進教育上的應用探討。美和技術學院學報，26:1，189-208。
- 陳惠美、黃雅鈴(2003)。遊憩治療理論與應用之發展。掌握學術新趨勢接軌國際化教育國際學術研討會-觀光組。155-172，桃園：銘傳大學觀光學院。
- 謝立文(2005)。淺談台灣運動休閒相關系所現況及師資學生數概況。國民體育季刊，145，52-56。
- Carla E. S. Tabourne(2004)。休閒服務品質與休閒治療。2004年國際休閒保健產業研討會報告書。1-20，屏東：美和技術學院休閒運動保健系主辦。
- 2007 高齢者休閒治療國際學術研討會研習手冊(2007 International Symposium on Therapeutic Recreation to the Elderly)。屏東。美和技術學院休閒運動保健系主辦。